國學院大學学術情報リポジトリ

# 大場磐雄「神道考古学」提唱前夜の祭祀遺跡研究



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-09<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 中村, 耕作<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.57529/00001958 |

# 大場磐雄「神道考古学」提唱前夜の祭祀遺跡研究

中村耕作

**要旨**

大場磐雄の提唱した「神道考古学」は、國學院の学問伝統を色濃く残した考古・民俗・文献三位一体の学問である。本稿では、その形成過程検討の一環として「神道考古学」提唱（一九三五年）以前の祭祀遺跡研究について、四本の論文とその執筆の契機となった祭祀遺跡調査を、後の「神道考古学」と比較しながら検討を行なった。大場以前の祭祀遺跡研究は、模造品研究と巨石遺跡研究の二大潮流があり、大場の研究もそれを踏まえて進行することになるが、その時期は考古学界において「祭祀阯」の概念が定着しつつあった時期と重なる。『神社と考古学』（一九二六―二八年）の原史時代の記述では、考古資料よりも文献資料・民俗資料の引用が目立っていた。これに対し、静岡県洗田遺跡・遠国嶼での祭祀遺跡の実地調査を経た「南豆における特殊遺跡の研究」（一九二七年）は石製・土製の模造品や手捏土器を検討の中心とし、類例を全国に求めて考察したものである。続く「上代祭祀阯と其の遺物に就いて」（一九三〇年）は、大和三輪山・伊予大洲の巨石の調査を踏まえて執筆されたものであり、年代を示す確実な遺物に乏しいことから、いわゆる「巨石遺跡」に対し、慎重な姿勢を示している。これらの成果を総合的にまとめた「原始神道の考古学的考察」（同年）は神道考古学提唱前夜の研究の集大成と言える。後の「神道考古学」では、祭祀遺跡の認定において、山・石・池などの祭祀対象の存在が重視されていたのに対し、この段階では、模造品などの祭祀遺物の出土が重視された点は最も大きな相違点であり、「器物崇拝」などの人類学・宗教学の用語もその後は用いられなくなる。一方、文献資料や民俗資料の積極的な引用、年代を示す遺物の重視、祭祀専用品を考察の中心に論じる点などは後につながる特徴として捉えることができる。中でも、年代を示す考古遺物は、巨石と古典を安易に結び付ける当時の風潮にあって、大場の独自性を担保する重要な論点であった。

**キーワード**

祭祀遺跡、模造品、巨石遺跡、大場磐雄、神道考古学

## 一　大場磐雄の神道考古学とその画期

### （一）「神道考古学」の学史的背景

國學院大學考古学研究室の初代教授として、また神道考古学の提唱者として知られる大場磐雄（一八九九―一九七五）は、鳥居龍蔵（一八七〇―一九五三）・折口信夫（一八八七―一九五三）・宮地直一（一八八六―一九四九）ら國學院の学統とも深いつながりをもった学者に師事した。すなわち、旧制中学時代より鳥居龍蔵に人類学・考古学を、國學院大學入学後は国史学科に在籍する傍ら折口信夫に民俗学を学び、内務省神社局では上司である宮地直一から文献史・神社史を学ぶ。このほか、仏教考古学を含めた考古学の大家であり一時内務省地理課にいた柴田常恵[1]（一八七七―一九五四）からも多くの教えを受けた。その学問をもっとも特徴付けるのが「考古・文

献・民俗三位一体の神道研究」と評された（佐野一九七六、三〇八頁）、三種の資料を統合して祭祀遺跡に迫る「神道考古学」である。

大場が活動をはじめた大正期は、考古学においては濱田耕作による型式学の紹介や、松本彦七郎による層位学的発掘の実践によって、その方法論が洗練され、近世以来の美術・建築・有職故実を含んだ考古学、あるいは明治期の人類学の一分野としての考古学から、独立した学問としての道を歩き始めた頃である。時を同じくして、柳田国男・折口信夫らによる民俗学が産声を上げ、神道史学においても宮地直一が文献考証に基づく研究を確立している。上記の四人の師のうち鳥居・柴田はいわば旧世代に属するものの、[2] 折口・宮地は新たな学問動向を背負っていた。一方、大場自身は、縄文土器編年を進めた山内清男（一九〇二―一九七〇）、弥生文化論を進めた森本六爾（一九〇三―一九三六）、仏教考古学研究を体系付けた石田茂作（一八九四―一九七七）など以後の研究の基盤を作り上げた、さらに次世代の研究者と同世代である。

大場の「神道考古学」は、宮地や折口らによって進められた近代人文諸科学の細分化・近代化の動向の一端を担うと同時に、三位一体、すなわち考古学・民俗学・文献史学の統合、という二つの側面を持つものとして重要である。その「神道考古学」の形成過程を追うことは、一分野とはいえ近代人文学における学問の体系化に至る数々の選択を明らかにすることであり、その原点への回帰は今後の考古学における祭祀研究にも寄与しうるものとなるはずである。

第１図　大場磐雄
（ob0605：1929 年）

## （二）神道考古学とその諸段階

### 神道考古学への略歴

大場（当時は谷川姓）は大学を卒業後、第二横浜中学校で教鞭をふるう一方、土偶・石棒などを対象とした石器時代宗教思想の研究（谷川一九二二・一九二六）、諸磯式土器を伴う文化の総合的把握をめざした「諸磯式土器の研究」（一九二四・一九二五）などの論文を精力的に執筆するなど石器時代の研究者として知られていた。[3]

その後、一九二五年一一月に内務省に嘱託として入り、神社局考証課で神社調査を職務とする中で課長宮地直一の代筆で『神社と考古学』（宮地一九二六）を著し、石器時代の宗教思想、原史時代の神社の発生、歴史時代の神社関係文化財などを概説した。そうした中、伊豆下田の三倉山・洗田遺跡と出会い、本格的に祭祀遺跡研究を志す。一九三五年には「神道考古学の提唱と其の組織」（大場一九三五ａ）を発表し、以後、二二編の関係論文を収めた論文集『神道考古学論攷』（大場一九四三ａ）、そして学位論文「祭祀遺跡の研究」をまとめた。これは「神道考古学の体系」（大場一九六四）などで部分的に公開されたが、関連する論文二三編と共に古稀記念の『祭祀遺蹟―神道考古学の基礎的研究―』（大場一九七〇）で全文が公表された。晩年には銅鐸や古墳、祭祀遺跡、式内社等の分布など多角的見地から古代氏族の動向に迫った『考古学上から見た古氏族の研究』（大場一九七五ｂ）をまとめている。

### 「神道考古学」の視点と方法論

「神道考古学」の最もまとまった成果は大場の学位論文「祭祀遺跡の研究」と、その骨格を公表した「神道考古学の体系」（大場一九六四）にある。はじめに、「神道考古学の体系」における祭祀遺跡の分類をみておきたい。第二図に示したとおり、最も特徴的なのはＡ１「自然物を対象とする遺跡」を第一に掲げ、詳細に分類している点である。[4] その研究の方法については、石

信仰に関する部分が最も典型的であるので、これを紹介する。まず、「古典に現れた石神・磐座・磐境とその意義」として六国史や風土記その他古文献に記された石信仰関連の記事を紹介し、次いで「各地における石崇拝の実例」として各地の神社境内の石崇拝事例を挙げ、最後にそれらと類似し、かつ考古資料を伴う事例を「祭祀遺跡」と認定して赤城山櫃石、雨境峠鳴石などを掲げる。

つまり、①自然を対象とする祭祀遺跡を重視し、②文献（古典）・民俗（現在の信仰）・考古（遺物）の三種の資料を用いて、③古典や現存の神社信仰・民俗信仰が、考古学的にどこまで遡りうるかという視点での研究、をその特徴として指摘することができよう。

【祭祀遺跡】
A　遺跡を主とするもの（祭祀の対象の明らかなもの）
　1 自然物を対象とする遺跡
　　山　岳　浅間型（富士型）……高山や火山のように遠方から畏怖崇敬するもの
　　神奈備型（三輪型）……集落に接近し、親愛の念をこめてまつるもの
　　巌　石　石神　立石型……高く聳立するもの
　　飯石型……盤居するもの
　　磐座　要石型……小形の自然石を対象とするもの
　　像石型……一種の紋理や特別な形状を有するもの
　　樹　木　（湛木型）……（神木に対するもの）
　　水　霊　鏡ヶ池型……鏡を投入するもの
　　養老型……延命長寿の信仰をもつ池泉・温泉
　　沖津宮型……海中の島嶼（航海安全を祈願）
　　三嶋型……群島への信仰（伊豆諸島など）
　2 古社の境内及び関係地
　3 墳　墓
　4 住居跡
B　遺物を主とするもの（祭祀の対象の不明なもの）
　1 祭祀遺物の単独発見地
　2 子持勾玉発見地
　3 土馬発見地
C　遺物の発見されないもの

【祭祀遺物】
石製品（滑石製模造品、子持勾玉）
土製品（粗造小形土器、土製模造品、土馬）
金属製品（銅鏡、鉄器、鉄製模造品）

（大場一九六四をもとに模式化）

第２図　「神道考古学の体系」における祭祀遺跡・遺物の分類

### 研究の画期と本稿の対象時期

この種の著作で最初に発表された『神社と考古学』の原始信仰期の目次をみると、石崇拝・樹木崇拝は墳墓や祭祀遺物の後に置かれており、体系的な記述にはなっていない。一定の体系性を持った「原始神道の考古学的考察」（大場一九三〇）においても、祭祀遺跡については西から順に掲げられており祭祀対象等での分類は行なわれていない。

「神道考古学の提唱と其の組織」と同年の「池中の鏡」や「赤城山神蹟考」に至ってようやくこの三点の揃ったスタイルが定着するのである（大場一九三五b・c）。つまり、著作に従うとこの時点に研究の画期が認められるのであるが、実はこれらの研究は一九三三・三四年の文部省精神科学奨励資金による各地の現地調査に基づくところが大きく、実質的な活動を見た場合には、この奨励資金による調査を画期とすべきと考えられる。

従って、本稿では『神社と考古学』の刊行から、三倉山・洗田遺跡との出会いを経て奨励資金を得るまでの祭祀遺跡研究に焦点を絞って検討を加えたい。なお、筆者は先に晩年の縄文時代信仰儀礼研究と対比する形で大場の学問形成の初期にあたる青年期の石器時代宗教思想研究を整理しており（中村二〇〇八a）、本稿はそれに続く時期を扱うことになる。

## 二　神道考古学提唱以前の祭祀遺跡研究

既に「神道考古学」の前史として大場自身（一九六四）によって学史がまとめられており、ここでは『祭祀遺跡』巻末の関係文献目録（大場

一九七〇）を合わせて参照しながら研究分野とその動向を大まかに整理しておきたい。それぞれの詳細については後述する。

### 石製・土製模造品

大場が学史の冒頭に掲げるのは近世における『雲根志』、『石剣頭考』、『耽奇漫録』などの石製模造品・子持勾玉に関する考察であるが、これらの多くは、祭祀遺物としての位置づけを伴わないものであった。明治期になると、千葉県東長田遺跡の報告中で大野延太郎（一九〇〇a）が模造品を非実用具とし、立地を含めて神事・儀礼に関わるものと位置づけた。和田千吉（一八九八）・関保之助（やじり生一九〇〇）も同様の見解を提示しているが、その後高橋健自（一九一九、高橋・西崎一九二〇）は奈良県山の神遺跡例を含めて石製模造品の殆ど全てを古墳出土例として位置づけた。

これに対し、京都府大宮売神社境内遺跡例を報告した梅原末治（魚澄・梅原一九二三）、山の神遺跡を検討した後藤守一（一九二六）や森本六爾（一九二六）、樋口清之（一九二八）が、これらの遺跡を祭祀に関わるものと指摘した。この間には柴田常恵（一九二四）が国史講習録の『日本考古学』において、概説書で初めて「祭祀阯」の項目を立て、後藤守一（一九二七）の『日本考古学』中の「祭祀阯」、八幡一郎（一九三四）の『北佐久郡の考古学的調査』中の「祭祀場阯」などが続いたが、その内容は模造品とその出土遺跡を中心とした記述であった。

### 土器・手捏土器の研究

大場によると、一七九八年に記された伊勢崎藩士関重嶷が『古器図説』において群馬県赤城山櫃石の土器と臼玉を図示して土器を日本書紀に見る「手玦」と解して、その地を祭祀場と述べている。この見解はその後長い間知られることはなかったが、古典をもとに遺物を解釈し祭祀遺跡の存在を考察した嚆矢として評価されよう。

明治期には、前掲の東長田報告の中で大野が土器底の木葉痕に注目しているほか、「所謂弥生式土器」を「埴瓮」と呼んだ上で、[5] 木葉痕の存在や、類似する土器が伊勢の神宮、春日大社で使用されていることなどから神を祭るためのものと推定した（大野一九〇二・一九〇三）。柴田（一九一五）は記紀に見える「イハイベ」を祭器とした上で、古墳出土の「スエ」と「イハイベ」を区別すべきことを説き、その後、静岡県御手洗池遺跡出土の土器群を立地の点から祭事に用いられたものと想定している（柴田一九二九）。鳥居龍蔵（一九二五）も古典に見える「斎瓮」「埴瓮」を考証し、出土品を神格を有するものとしている。

### 神籠石問題

明治末年から大正期において霊域説（磐境説・神奈備説）[6] と山城説とで学界を賑わせたのが神籠石問題である。霊域説の主要な論拠は神籠石が非実用的設備とみられること、域内に古墳や神社が存在することにあった。そして、霊域すなわち「神奈備」を岩石を以って画したものを「磯堅城神籬」もしくは「磐境」とし、神籠石の呼称を磐境に変更することを提唱したのである（喜田一九一〇a・b・一九一三など）。帝室博物館の津田敬武（一九二〇）は『神道起源論』を著し、記紀・延喜式などの古典にみる祭礼の記載と関連する考古資料をまとめているが、その中の「磐境・磯城」の項で神籠石を取り上げ、同じく古墳や神社の存在を根拠に「磐境・磯城」に比定している。同書には他に鏡・勾玉・銅矛なども紹介されているもののいずれも考古資料を主眼とした記載ではない。なお、上記柴田の『日本考古学』においても「祭祀阯」とは別の「城塞」の項目において両説を詳しく紹介している。

### 「巨石遺跡」問題

神籠石問題に代わって「磐境」との関連が議論されたのが大正末年以降の「巨石遺跡」問題である。鳥居龍蔵（一九二五・一九二六・一九二七・一九三五など）は石に対する古典の記載や欧州の巨石記念物を踏まえて日本の立石をメンヒル、列石や神籠石をストーンサークルに比定、さらにそれらを「磐座・磐境・神籬・磯城・神奈備」と結びつけた。その後、日本各地の巨石を同様に巨石記念物と解し、信仰の場とした。

「祭祀遺跡」概念の定着と模造品研究、「巨石遺跡」問題

このほか高橋健自（一九二七）や森本六爾による青銅器研究などもあるが、ここでは古墳時代以外の研究については省略することとしたい。

以上のようにこの時期、遺物においては石製・土製模造品と手捏土器、遺構においては「磐境・神奈備」などとされた神籠石や巨石群が信仰・祭祀に関わるものとして議論されてきた。特に、議論の中心は模造品と「巨石遺跡」にあった。また、現在の「祭祀遺跡」概念につながる「祭祀阯」が、大正末期の柴田や後藤などの概説書において定着しつつあったこと、そこにおいて議論の中心を占めたのが石製・土製模造品であったことは大場の研究の背景として重要である。

## 三　出発点としての『神社と考古学』

### （一）「神社考古学」とその範囲

谷川は一九二六年、宮地直一の代筆で考古学講座の一編として『神社と考古学』を執筆する（宮地一九二六―二八）。『考古学講座』は一九二六年より国史講習会・雄山閣によって刊行されたもので全三二編を収める。当初各編を分載・合冊して配本されたが（紫本）、後に題目ごとに整理され（黄本「第三図」）、さらに著者ごとに整理され（一冊本）、刊行された（坂詰一九八三）。当初の広告を見ると「神社と考古学」の名は挙がっておらず、後から加えられたものとわかるが、四月後の第一回配本には早速掲載されている(7)。目次は以下のとおりである。

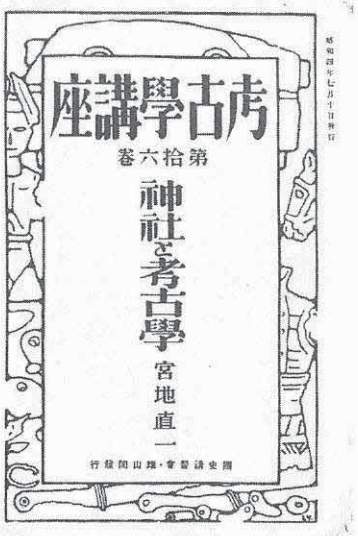
第一章　神社考古学に就いて
第二章　神社考古学の範囲
第三章　原始信仰期
　イ　石器時代の宗教的遺物
　ロ　原史時代の宗教思想（墳墓の変遷、宗教的遺物、石崇拝、樹木崇拝）
　ハ　神社の発生（墳墓、神籬、社殿の発生）
　ニ　神事その他に現はれた考古学的遺物
第四章　有史期（外来思想混淆期）
　イ　神像　ロ　神饌　ハ　調度及装飾　ニ　建築　ホ　棟札
　ヘ　其他　ト　鰐口　チ　制札　リ　額と絵馬　ヌ　燈籠
（細目は第三章ロ～ニのみ表示し他は省略した）

「神社考古学」の存在意義

はじめに、第一章・第二章の「神社考古学」についてみていきたい。第一章ではまず神祇史を形式的・歴史的方面と宗教的・哲学的方面に大別した際、前者に関して考古学的観察を必要とする事柄が多い、として神社の考古学的研究の重要性を説く。これは、神社局考証課における昇格審査で文献のみが重視され、考古資料や民俗資料が無視されたことへの疑問を感じていた頃、「神社と考古学」の代筆を命じられたとする、後年の『まつり』（大場一九六七）の一節と符合する。仏教考古学の成果との比較・協業にも言及している。

石器時代宗教思想と神社との関係

第二章では「原始信仰期（前神道期）」の資料として、発掘資料である土偶・土版・石棒・古墳・副葬品あるいは、神籬磐境の研究及び神社建築と埴輪銅鐸に示された家との比較、祭器と石器時代との系統上の研究がこの期の問題となると述べている。



第３図　『神社と考古学』

ここで注目されるの

は、まず、石器時代を含めていることである。第三章の冒頭で、「原始神道」でなく「原始信仰」と称すべきとし、石器時代の宗教思想をそのまま神道の起源としている訳ではない。第三章（イ）の内容については別稿で検討したので繰り返さないが（中村二〇〇八ａ）、諸外国の石器時代や現代未開人と類似する、アニミズムの段階にあったことが結論となっている。このことは、神道・神社と石器時代との関係を検討せずに、日本における最初の住民の信仰として、この時期の資料を扱ったことを示しており、[8] この姿勢は、以後大場の晩年に至るまで継続することになる。

なお、もう一点指摘するならば、土偶から副葬品までの資料と、神籬・神社建築などは別種の資料であるものの、等しくこの時期の検討対象とすべきことを説いている点である。詳しくは後述したい。

### 神社との関係の濃淡による資料の分類

最後に、関係する資料を、神社の祭神との関係の濃淡によって第一類から第四類に区分している。第一類として神籬、磐境、社殿、神像、祭器など一一項目、第二類（附属品）として棟札、制札の類、第三類（奉納品）として梵鐘、懸仏、鏡、塔など三二項目、第四類（偶然所蔵するもの、間接に関係するもの）として墓誌、銅剣銅鉾、各種発掘品、絵銭が挙げられている。ここでは、発掘品が第四類と比較的軽視された位置に置かれていることを確認しておくに留める。本書刊行の時点においては、考古学資料とは発掘品に限らず、歴史時代の各種伝世品も重要な対象であったことは、「梵鐘」「和鏡」「貨幣」「金工史」「漆工史」などの本講座の題目を一瞥すれば一目瞭然である。

## （二）『神社と考古学』における原史時代

### 葬送儀礼への言及

「ロ　原史時代の宗教思想」の節であるが、冒頭に置かれているのは墳墓に関する記述である。石棺の形態から宗教的意義を推察した後に、古墳を神社の主体とする事例を紹介している。葬送儀礼については後の「神道考古学」においては殆ど述べられず、わずかに神社の起源としての古墳について触れられるのみであったことと比べると大きな違いとして注意すべきであろう。この原因は「宗教思想」という標題に求めることができるのではないかと思われる。つまり、本書では死者への恐怖・愛情という「神道考古学」で対象とする神祭りとは異なった種類の宗教思想をも包括して記述されているのである。もっとも、葬儀と祭儀との同一や古墳上の神社の起源などの問題は、その後も継続して検討される部分である（大場一九四三ｂ）。

### 宗教学的理論の適用

続く宗教的遺物の項目では銅鐸・玉・鏡・剣などを「フェチシズム」（器物崇拝）の所産とした上で、土器（斎瓮）に関する古典の記述と現在の神社で使用される神饌用の土器の紹介に続き、「弥生式系土器」の出土例（京都府大宮売神社、埼玉県秩父神社、東京都蒲田八幡神社）について住居跡の可能性も挙げながらも当時の祭器との見解を示している。ここで注目されるのは、以上に続いて、「かかる思想行動は如何なる信仰より起こったか」として、それらの行為を「Magic の一種」とする点である。上記の「フェチシズム」の言い換えであるが、これまで精力的に行ってきた、土偶・石棒などに「トーテミズム」、「ファリシズム」（生殖器崇拝）、「フェチシズム」（器物崇拝）などの外来の理論の適用を試みた石器時代宗教思想研究（谷川一九二一・一九二六、中村二〇〇八ａ）と同様の視点が窺えるもので、本書前半の「石器時代の宗教的遺物」においても強く認められる。土器に続いて剣・鏡・玉について、古典の記述を紹介するが、その中にも「デモン」、「シャマニズム」、「マジック」などの言葉が随所に見られる。

こうした用語に窺える人類学・宗教学理論は、いわば人類の普遍的側面をモデル化したものであり、「本邦古来の宗教であり思想（中略）である神道を背景とした考古学」（大場一九三五ａ）である「神道考古学」には殆ど姿をみせない。この点も本書の大きな特色の一つである。

### 考古学資料に拠らない記述

次に、石製・土製模造品が種類別に列挙されるが、特に特徴的な記述は認められない。続いて石崇拝・樹木崇拝に多くの紙数を費やす。石崇拝の項目では古典の記載、皇大神宮儀式帳や延喜式所載の石を社名に持つ神社などを丹念に紹介した後、諸国の石神（葛飾立石、鹿島要石など）を挙げ、最後に鳥居龍蔵の立石＝メンヒル説を紹介するものの年代決定の難しさから判断を留保している。樹木についても樹種ごとに古典や現存の神木としてのあり方を挙げている。

これらの記述は古典の記載と現在の信仰が紹介されるばかりで、「巨石遺跡」を除き、対応すべき考古資料については一切触れられていない。この辺りから先に指摘した考古学以外の資料による記述で占められるようになっていく。

これは次節「ハ　神社の発生」においても同様で、まず諏訪大社や松尾大社の例を挙げて社殿発生以前の様態について述べた後、「磐境」の項目を立て、古典の記述を紹介し、続いて神籠石問題に触れる。神籠石の実例を詳しく紹介するほか、近江三峯、阿波中之庄の列石や鳥居の報告した出雲比婆山の「巨石遺跡」などを類例として掲げ、年代決定の難を指摘した上で、「中には磐境の俤を傳へたものも存してゐるかも知れぬ」と結んでいる。続いて「神籬」であるが、古典における「神奈備・神籬」に続いて上賀茂神社の「みあれ」を紹介するのみである。続けて社殿の古形態として大社造と神明造という建築様式の説明へと話題が移っていく。さらに、「ニ　神事その他に現はれた考古学的遺物」では神社自体を有形無形の各種の物を包括する「考古学上に於ける生きた資料」と位置づけ、出雲大社における火錐臼・杵や伊勢の神宮における舞錐、あるいは貫前神社における鹿占を紹介している。磐境・神籬ともに古典からの接近であり、建築や神事もまた現存資料からの遡及という点で非考古学資料に基づく議論である。

こうした記述からは「神社考古学」を標榜するものの、むしろ原史時代の信仰を、考古学的側面とともに古典・祭礼・建築などの側面からも合わせて記述しようとする姿勢が窺えよう。

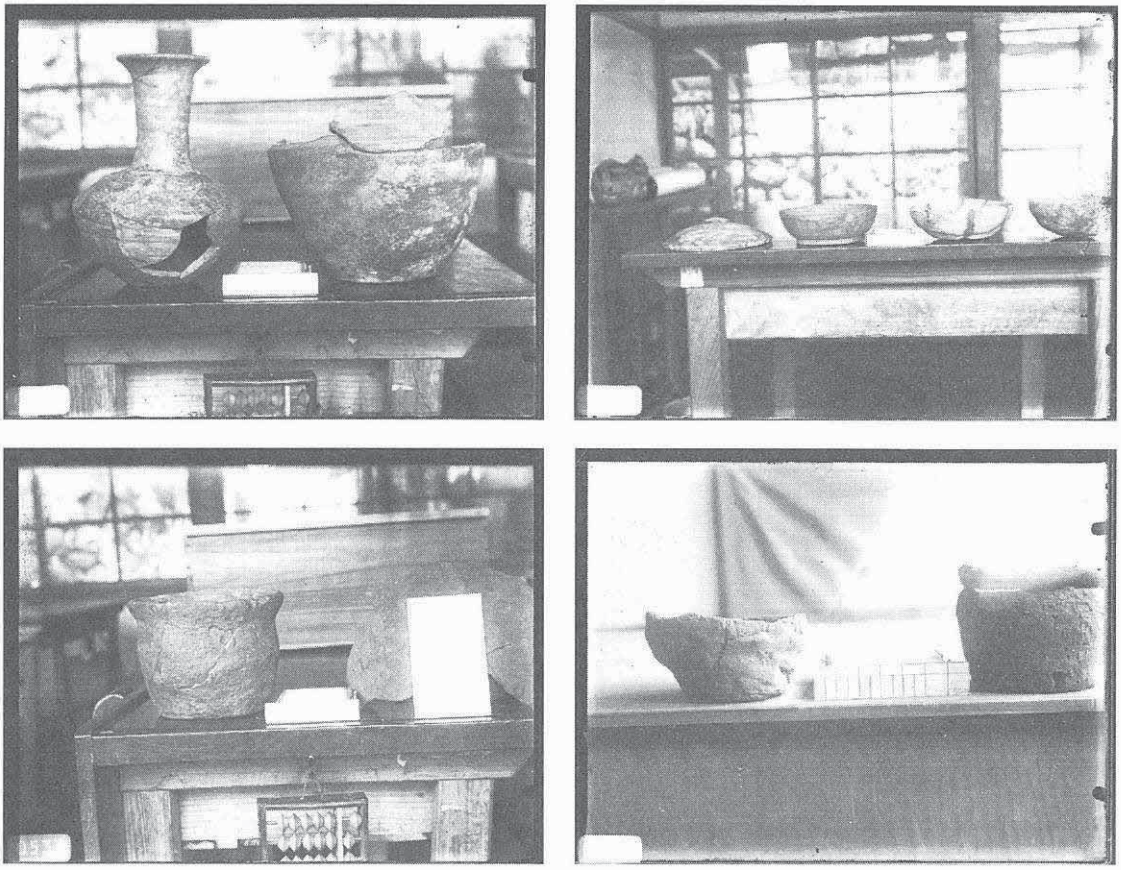
### 古典の豊富な引用

なお、ここでもう一点指摘しておく必要があるのは、大場の記述における古典の引用例の豊富さである。大野延太郎（一九九〇a）は木葉痕を論じる際に延喜大嘗会式を引き、埴瓮については記紀を引いていた。柴田常恵（一九一五）も「斎瓮」について記紀を引くが具体的な箇所は示していない。一方、磐座・磐境・磯城・神奈備などの用語についても、喜田貞吉（一九一〇b）が常陸国風土記を引くのみで、鳥居龍蔵は具体的な引用はしていなかった。

これに対し、『神社と考古学』における古典文献の引用は、土器に関する部分については日本書紀、万葉集を、「磐境」については日本書紀、常陸国風土記、出雲国風土記、文徳天皇実録を引く。この他、墳墓、剣・鏡・玉、石・樹崇拝の項で引かれた文献を列挙すると、隋書倭国伝、古事記、日本書紀、万葉集、風土記、続日本後紀、先代旧事本紀、倭姫命世紀、皇大神宮儀式帳、延喜式、和名抄、伊呂波字類抄、八幡宇佐宮御託宣集などとなる。こうした多数の古典文献の引用も本書の大きな特徴ということができよう。しかしながら、これらの史料批判は一切行なわれておらず、記載内容の検討もなく単に事例として挙げられているのみである。従って、本稿でも検討対象とせず「古典」の引用として言及するにとどめたい。

### 『神社と考古学』の意義

『神社と考古学』は、考古学界において「祭祀阯」の概念が定着しつつあった最中に著されたものであった。柴田や後藤の用いた「祭祀阯」の語はまだ用いられず、また模造品も中心とはなっていない。他方、もう一つの学界の潮流であった神籠石・巨石問題に関しても、一部触れるものの年代決定の問題を理由に賛同していない。他方、神社自体を「考古学上に於ける生きた資料」とする点は、他の「祭祀阯」研究には無い視点である。こうした点は、同書が当時の祭祀遺跡研究においてパイオニアの一角としての位置にあったこと



第４図　下田市遠国嶼出土遺物（ob0535～0538：1927年）

を示している。

これまで述べてきたように後の大場の研究と比較した際の特徴は、葬送儀礼に関する記述、宗教学理論の適用、考古学資料に拠らない記載であった。このうち前二者は「神道考古学」においては殆ど見られなくなる。一方、後者に関しては、ここで用いられた文献・民俗資料に考古学資料（発掘資料）を加えることで、上記特徴②の三位一体の研究へと進化していく途上にあるものと評価することができると考えられる。

## 三、洗田遺跡の発見と「南豆に於ける特殊遺跡の研究」

### （一）遠国嶼・洗田遺跡の調査

神社局考証課に勤務し、『神社と考古学』を執筆した後も、谷川の主たる関心は変わらず石器時代にあった。石器時代研究者としての谷川磐雄の名を一躍高めたのが一九二七年、柴田常恵との共著で刊行された『考古学研究録第一輯　石器時代の住居阯』中の「南豆見高石器時代住居址の研究」である（谷川一九二七ａ）。その経緯については別稿（中村二〇〇八ｂ）に記しているため省略するが、見高段間遺跡（現河津町）の調査のため三度にわたって伊豆半島を訪れており、周囲の遺跡の踏査や採集品の調査にも余念が無かった。同年三月の最初の調査では下田市遠国嶼にも足を伸ばし、小学校や後述の武山閣遺物を調査している［第四図］。遠国嶼は土師器・須恵器が多数出土した八世紀の祭祀遺跡であり、既に足立鍬太郎（足立・堀田一九二七）や柴田常恵の調査が行なわれていた。当時の研究日誌『楽石雑筆』には、近世以降石畳上の坩が神体であったこと、遺物の出土状況の奇異なこと、手捏土器が多く、多くが木の葉を付すもので日用品とみられないことなどから「宗教上の遺跡」とし、「当時古代の自然崇拝によってこの島が全体崇敬せられ居り、その頂上に神霊の鎮祭を信じ、奉斎の具として土器、陶器を奉納せる

ものなるべし（中略）自然崇拝の対象として見るをやや妥当なる如し。神体が土器なりしことは石棒その他が神体なりしことより考えて可能性あり。石畳はあるいは古代磐座の遺形ならんか」との所見が残されている（大場一九七五、二七二―二七三頁）。既に、こうした土器を祭祀用とすること、これが自拝に起因すること、石畳を磐座と想定すること、といった見解がまとまっていたことを示す貴重な資料である。

見高の二度目の調査の際には、洗田遺跡を訪れている。洗田遺跡は前年に加藤勝信ら地元青年団による発掘で土製勾玉・土製模造鏡等が出土し、これを受けて地元でバス会社を経営する鈴木吉兵衛も発掘を行なっていた。鈴木は私邸を「武山閣」と称し、仏像や出土品を多数陳列しており、谷川の南伊豆調査を強く支援した人物である。谷川は一回目の調査でそれらの出土品を見学し、強い興味を抱いていた。四月一二日、現地を訪れ、「つらつら思うにここは古代の祭址なり。これと似たる例各地にあり、かつ余はその西方にそびゆる三倉山を崇拝せしに非ずかと推測す」と感想を記している（大場一九七五、二七八頁）。次いで吉佐美小学校で遺物を調査し、再び遺跡に戻る。『楽石雑筆』によれば昼食での酒に酔って目覚めると四時頃であったらしい。「この時春の陽も暮れかけて、夕陽が西に傾いた時、遺跡の西方に陽を背景にして兀然と私の眼底に映ったものは、三倉山の麗姿であった。（中略）この祭祀遺跡はこの霊山を対象として行われた跡であろう。私はこの時一種の霊感に打たれたといっても過言ではなかった。私にはまだ残された仕事がある。古代祭祀址の研究こそ、その主眼となるべきではあるまいか、こんなことを思い立たせたのであった」（大場一九六〇、二四三―二四四頁）との著名な回想はその際の情景であろう。

## （二）「南豆に於ける特殊遺跡の研究」

### 洗田遺跡と同種遺跡の特徴

これらの遺跡の報告として執筆されたのが「南豆に於ける特殊遺跡の研究（上・中・下）」（谷川一九二七b、第五図）である。本編は洗田遺跡、遠国嶼、および製鉄遺跡である金草原遺跡の各報告と考察の三部構成でなる。洗田報告においては遺跡の説明において「前方には三角形に聳ゆる三倉山の雄姿を仰ぎ見る地點であることを附記して置く」と述べた上で、出土品として埴瓮（土師器）・瓮斎（須恵器）・土製勾玉・土製円板を挙げる。埴瓮は手捏、厚手粗製で底部に木葉文を印し、一部は描いたものもあることを指摘して実用品以外の用途を想定した。瓮斎の出土量は少なく解説も短い。土製勾玉と土製円板は洗田遺跡を特徴付けるものとされ、手捏土器と同様模造品として製作されたものとし、土製円板については大野（一九〇〇a）と同様に鏡と想定している。さらに、石製品が一点も出土していないことに注意をむけている。

次いで、同種遺跡として奈良県三輪山の神（高橋・西崎一九二〇）、千葉県東長田（大野一九〇〇a）、京都府大宮売神社（魚澄・梅原一九二三）、千葉県弓田猪ノ子（高橋前掲）、同丁字山（同）、群馬県米岡南郷（同）、福岡県真砂（魚澄・梅原一九二三）の事例を紹介するとともに、古社境内における石製模造品・土馬・土犬出土地五例、その他模造品出土遺跡五例の計一七遺跡を示し、その特徴として「a封土の無い事、b往々特殊設備を設けたものの存する事、c神社と関係ある事」という共通点を挙げ、遺物については仮器を主とするとした上で「a土器は手捏ね厚手粗製且つ小形を主とし、底部に木の葉を印するもの、多い事、b勾玉及その他日用品の土製模造を出土する事、c瓮斎の混出少なき事、d石製模造品（就中鏡・勾玉・小玉・管玉・剣等を主と

南豆に於ける特殊遺跡の研究（上）

谷川著雄

緒言

北に千米前後の天城山脈が自然の障壁を作り、南に渺茫たる太平洋が三方から迫つてゐる南豆は、既に地的環境の支配を受けて、半島さいよりも寂寞たるゐさい太感を有し、ナポレオン山脈を境として、北と南に於ける人間種族を異にする伊太利半島も、やはりその道を一にする所である。而して余が最近調査した考古学的方面からも、驚嘆ながらこれを指示し得る証跡を提供した。それ等の詳細はなほ別に一文を草する意志を有するから、茲には省く筈れぬ。上述する如き位置にある南豆は、さこに含まれるすべての物件に著しい影響を及ぼしなかつた。今は自動車の力で三時間位にて修善寺から下田に到達し得るが、半世紀と隔らなくとも、陸路による交通機関の頗る困難であつた事は想像に難くない。又海路による交通路も、近年下田港が修繕開港の恩恵を蒙つたが、しかし実際下田の地を踏んだ人は、それに匹敵する感動は殆んど感じられないのみか、一歩下田を去れば全く衰朽と荒涼の日本の生活や思想が流てゐるのである。故に南豆に強入して、且つ調査され、成長した古代文化の結晶は、自らなる地理的隔絶と、殊して風潮を受けなかつた為と、保存と発展の相は、僅かに南豆に於て異まれてゐた。

（続）

第５図
「南豆に於ける特殊遺跡の研究」

す）を伴出する事、e子持勾玉を稀に伴出する事、f稀に金属器を伴出する事」を指摘した。

### 石製模造品の先行研究

続いて、谷川は先学諸氏の研究を踏まえて模造品を宗教関係遺跡（祭祀関係址）と位置づける。その略史については上述したが、以後の谷川の考察との比較のため、やや詳しく振り返っておきたい。

この種の遺跡の初めての報告となった千葉県東長田遺跡の報告中で大野延太郎（一九〇〇a）は土器底部への「木ノ葉の痕アルモノ」（あるもの一八個に対しないもの三個との比率を出している）、「手ヅク子ノ甚タ粗雑ノ器」、土製の勾玉、小円板に注目、それ以外の素焼土器（土師器）や祝部土器（須恵器）、瑪瑙勾玉は古墳より発見されるものの、粗雑なものの出土例はないとした。さらに小円板を鏡の模造と想定し、また延喜式を参照して木葉痕と神饌の柏葉との関係を考察して、「或ル神事上ノ儀式ヲ行ナフ為メ一時ノ用ニ供ヘタルモノナラン」と解した。同年の「石製模造品に就て」では古墳出土三例、古墳以外出土八例を挙げるものの「只儀式的に葬所に納め、或は土中に埋まれたりと云ふの他考説を立つる能はず」と論じている（同一九〇〇b）。これに対し、七九遺跡の石製模造品を集成した高橋健自（一九一九）は石製模造品の殆ど全てが古墳に関係あるとし、奈良県山の神遺跡の報告においても同遺跡を古墳の破壊されたものと位置づけた（高橋・西崎一九二〇）。なお、高橋は日本書紀を引用して石製模造品の小孔を儀礼の際に木の枝に懸けたものと想定している。

他方、京都府大宮売神社境内遺跡例を報告した梅原末治（一九二三）は土器は祭器の類とすべきもの、あるいは土製模造器具とすべきものが大部分を占め、また石製模造品が儀礼具であるという前述の高橋説をもとに、「上代ニ於ケル特殊ノ宗教的意味ヲ有スルモノニアラザルカ」と述べ、遺跡が丹後における古社の境内にあることもその推測を裏付けるものとし、類例として大神・日前国懸・鹿島・香取などの事例を紹介している。また、山の神遺跡の鏡を検討した森本六爾（一九二六）は伴出した子持勾玉や模造品の性格を考慮して「祭祀用の仮器」とし、後藤守一（一九二六）も土製模造品の出土を示して「上代に於ける祭祀の遺址」と解している。

柴田常恵（一九二四）の「祭祀阯」においては、到底実用品と思われない土製品の出土、古墳・横穴との遺物の趣の違い、石製模造品の出土、構造物を伴わないことなどを特徴としてあげ、「神社の存せし場所若くは祭式を行ひし地點」と結論付けている。これらの先行研究により、模造品＝祭祀遺物との認識が形成されていたのである。

### 土器・石製模造品の考察

話を「南豆に於ける特殊遺跡の研究」に戻そう。谷川はまず、土器について日本書紀神武紀や崇神紀における土器を用いた祭祀に触れ、Magicの一つとして日常生活に必須である土器が用いられたことを指摘した。また木葉痕については、甕棺での事例にも触れつつ、単なる装飾ではない重要性を指摘し、古典にみる神饌と柏の関係を紹介した上で、「祭器と木の葉底は密接な関係ありとする常套的思考」から発生したものと想定している。土器に関する考察は前記の大野（一九〇〇a）や鳥居（一九二五）と近い内容である。

石製模造品については高橋の主張どおり古墳からの出土が多いことを認めた上で「神を祭る場合も、死者を葬る場合も同一であった事を示している」とする一方、古墳出土品がより精巧なつくりであり、器種にも違いがあることを指摘した。[9] なお、洗田遺跡で石製品がみられない要因としては適当な産地がなかったためと想定している。

### 遠国嶼の考察

遠国嶼についても、遺跡の概要と出土遺物を列挙し、須恵器が土師器よりも多いこと、盤・杯・蓋杯が多いこと、手捏土器や木葉痕の存在すること、という特徴を示した上で、居住に適さない立地であること、須恵器とともに非実用的な手捏土器が併用されていることなどから、これを古代祭祀の遺跡と理解し、模造品を出土しないことも加えて、洗田よりも後代のものとして

位置づけた。手捏土器や木葉痕については古来の習俗が残ったものとしている。最後に、宗像沖ノ島（柴田一九二七）を紹介し、他の島嶼においても同様の祭祀遺跡の存在を予見する。

「南豆に於ける特殊遺跡の研究」の持つ意味

以上、「「南豆に於ける特殊遺跡の研究」の大要を紹介してきた。洗田遺跡の考察においては土器と模造品が記述の中心となっていたが、これは『神社と考古学』において不足していた考古資料の実例の検討を大きく前進させたものとして重要である。未だ「マジック」という言葉が用いられているが、人類学的な議論には向かってはいない。

また、祭祀遺跡認定の根拠が古典や民俗例に依拠して、そこから遡る点では後の「神道考古学」と共通するものの、「神道考古学」における自然を対象とする空間自体の存在を導き出した上で、そこでの考古資料の出土例を挙げるという論法と比較すると、本論文での祭祀遺跡認定が「祭祀遺物の出土」という点にあることは、大きな相違点として指摘できよう。

遺物の考察においては、葬・祭の両面で石製模造品が使用されること、但し古墳出土品の方が精巧であること、器種に違いがあることなどが新たに指摘された。石製模造品出土古墳が古式に属することは指摘しているものの、この時点では祭祀遺跡についての年代については言及していない。

なお、三倉山については『楽石雑筆』において既に祭祀対象として見当をつけ、本文中でも、その可能性に言及しているものの、一九三八年の再調査報告（大場ほか一九三八）において三輪山などの類例を掲げて「神奈備式霊山」として位置づけているのとは異なり、積極的な考察は行なっていない。このことは、この段階での祭祀遺跡研究が遺物、特に模造品と土器の研究に比重が置かれていたことを示すものである。[10]

## 四　巨石調査と「上代祭祀阯と其の遺物に就いて」

### （一）三輪山・鳥見霊畤・大洲神南山・籠神社の巨石調査

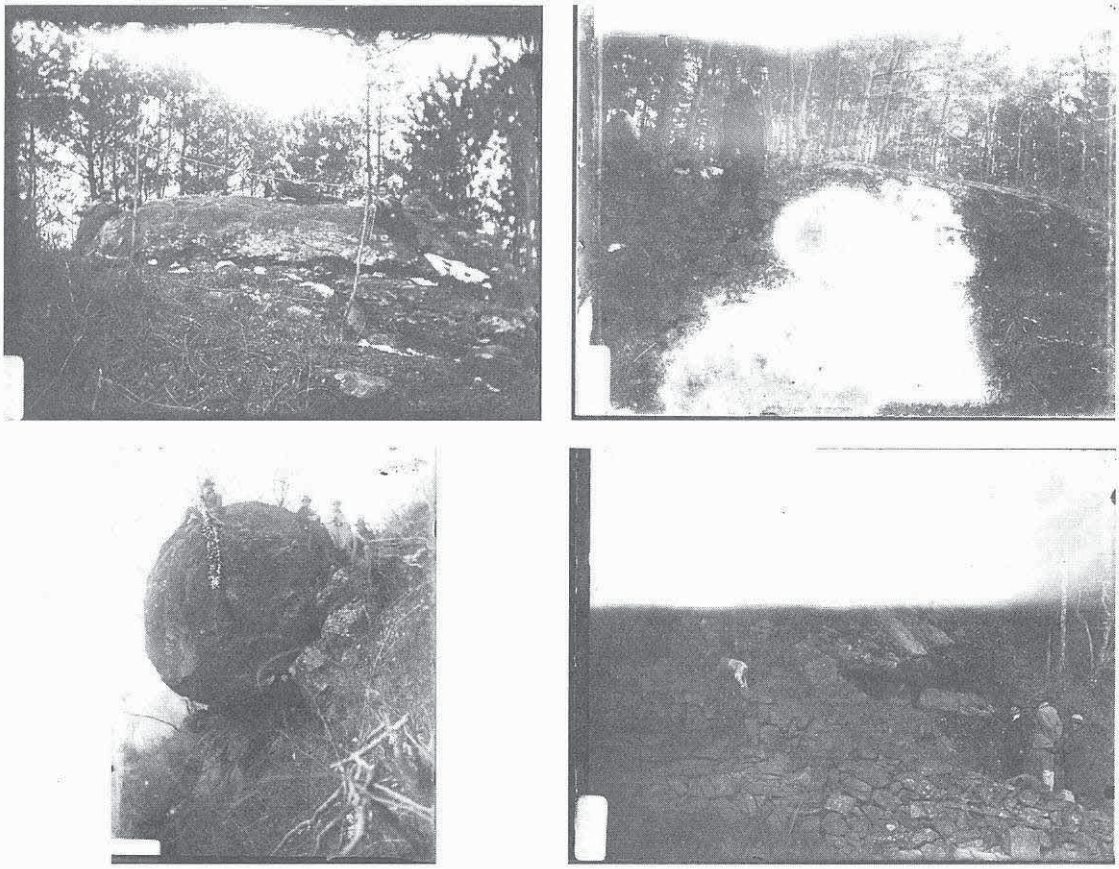
当時畝傍中学生であった樋口清之は三輪山中の禁足地で巨石群を調査し一九二七年、その内容を報告した（樋口一九二七）。翌春、大神神社が神社局に善後策を伺い出たところ神社局としても調査を要することとなり、谷川が担当して七月二三・二四の両日調査が実施された。一行は近世以来多数の模造品類が出土している辺津磐座下方から拝殿裏の禁足地（茶臼山）や、山中の奥津磐座・中津磐座、山頂、および西方オーカミ谷・地獄谷・大谷伝法寺谷等の巨石群を見て回った［第六図］。この辺りの事情については後年の『まつり』（一九六五）で述べられており、具体的な調査結果については『楽石雑筆』に詳しい。後者は晩年まで公開されることはなかったが、その中で、山中に四箇所の巨石群集地の存すること、形状に「一、一個又二個兀立せるもの、二、群集せるもの、中に巨石あるものとなきもの、三、サークルをなすもの」があり、頂上のサークルは意義あるものであろうが、他は火山噴出時の岩石布置、転落・事故、後世の崇拝等の要因を検討すべきと記している（大場一九七五、三二七頁）。

なお、これに先立つ二二日には神武天皇伝承にみえる「鳥見霊畤」とされた丹生川上神社中社付近の石畳を見学している［第六図］。『楽石雑筆』には、「登山者の悪戯及び木標樹立の為になせる変化も知るべからず」とあり、また、青年団によって巨石が掘り起こされたものの何も出土しなかったことについて「始より予期せし通りなり」とみえた上で「科学上よりと一般社会上よりして鳥見霊畤問題の差異あるべき」を宮司に告げている。

この年の九月、谷川は母方の大場家を相続し、改姓する。

同年末の『楽石雑筆』には、京都府籠神社の社殿造営にあたり、摂社真名井神社の背後の「鶺鴒石」あるいは「子種石」と呼ばれる巨石下より石器時代の土器・石器、手捏土器、鉄片が、また隣接するマウンドの発掘で経筒・

第６図　奈良県三輪山中の巨石群（上・下左）・「鳥見霊畤」比定地（下右）
（ob0578・0582・0583・0550：1928 年）



第７図　愛媛県大洲付近　上左：「神南山」　上右：「妙法寺山」　下左：「神南山トンビ岩」
下右：高山横畑のドルメン（ob0597・0598・0599・0601：1929 年）

和鏡四面等の出土があったこと、考証課長宮地直一が調査に訪れたほか、同社より写真および遺物が持参されたことなどが記されている。

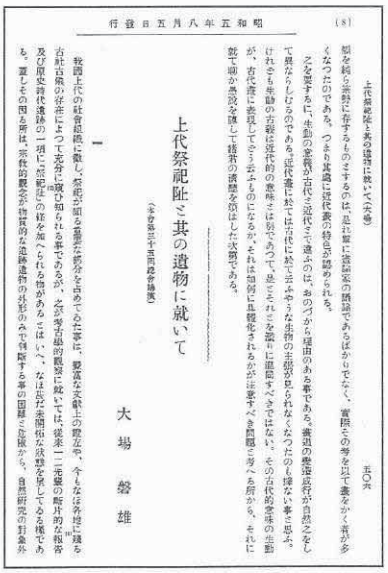
翌一九二九年正月の『楽石雑筆』は、籠神社の巨石に興味を抱いたことから、樋口清之より依頼されていた愛媛県大洲神南山の巨石遺跡調査を決行する旨の記載からはじまる。樋口は一九二七年に國學院大學に入学し、鳥居の指導を受けていたが、大洲の梁瀬神陵奉賛会からの委託を受けて同地域の「巨石遺跡」を調査していた。前年一一月には鳥居龍蔵も調査に訪れている。大場は、正月四日に出発し、八日より一二日まで調査を続けた。『楽石雑筆』の記載は詳細なもので、調査工程の要約は困難であるが、後に樋口（一九三〇）によって命名される高山群、如法寺山群、梁瀬山群、紅葉山群、神南山群の各所を廻っている［第七図］。最後に掲げられた所見には、一、少彦名命の伝承を考慮すべきであること、「二、（前略）巨石には各々俗信仰又は民潭の存在ありて、信仰山の対象となせるものの如し磐座、磐境、神籬などと称すべきか（ドルメン、メンヒルの称はいかがか）」、「三、神南山は昔神鍋山と称す（中略）蓋し「カンナビ」山ならん」、「四、（前略）出雲原の神々が巨石の崇拝多きこと、神奈備山磯城の存在等も合せ考うべき点なり」、「五、以上の諸点より少彦名命と巨石とは何等かの関係を有することは首肯し得べし」「六、巨石遺跡の年代並びに用途目的に関してはまだ確証なし。今後の発見に待つべし」（大場一九七五、三三八頁）とし、巨石と出雲系の神々との関係、「神奈備」との関係を考慮しつつ、三輪山同様年代の問題について注意をはらっている。

その後三月二日より籠神社へ出張し、四日到着し早速出土品を調査、翌日海部系図を見学した後、真名井神社の現地調査を行なった。ここでは特に所見は残されていない。

## （二）巨石問題と「上代祭祀阯と其の遺物に就いて」

### 「上代祭祀阯と其の遺物に就いて」における巨石問題

このように一九二八年から二九年にかけて三箇所の「巨石遺跡」を踏査した大場は、一九三〇年五月、考古学会総会において「上古時代に於ける祭祀跡」と題して発表し（無署名一九三〇）、その内容はまもなく「上代祭祀阯と其の遺物に就いて」として活字化された（大場一九三〇a）。本論では祭祀阯を（1）遺跡―（a）祭祀阯・（b）祭祀関係阯、（2）遺物―（a）祭祀遺物、（b）祭祀関係遺物に分類し、祭祀阯として東長田、大神神社禁足地、山の神、大宮売神社境内、猪ノ子、洗田、遠国嶼など、祭祀関係阯として子持勾玉・土馬などの出土地、青銅器埋納遺跡、石上神宮禁足地、沖ノ島などを挙げている。注目されるのは祭祀阯に確実性に乏しいとしながらも「磐境・磯城・神奈備」なども加えている点であろう。祭祀阯の内容に関しては従来の著述と大きく変わるところはないが、特に古社に因む事例として八例を挙げていることは明記しておく。続いてその実例として大神神社禁足地・山の神遺跡を取り上げる。前者に関しては模造品類を仮器とした上で類例として伊勢の神宮や大宮売神社のほか鹿島、香取、赤城、天津、日前国懸、伊弉諾の諸社からの出土を挙げている。後者については大部分が厨膳具であることに注目し、単に祭祀具というのみならず具体的な祭儀を復原する上での重要性を指摘する。続いて三輪山の巨石群に触れているが、そこでは鳥居や樋口の見解の当否は別、と述べた上で三輪山が古来崇拝されてきた場であり、そこに「磐境・磯城」の存在する可能性は高いとし、この点において前掲の分類の祭祀阯に「磐境・磯城」を加えたことを記している。つまり、「巨石遺跡」の評価と、「磐境・磯城」の概念とは別に考えていたことを示している。



昭和五年八月五日發行　（8）

上代祭祀阯と其の遺物に就いて（大場）

五〇六

型を純ら崇拝に存するものとするのは、是れ畢に後論家の臆論であるばかりでなく、實際その考を以て義るかく事が多くなつたのである。つまり其過に現代表の特色が明められる。

之を要するに、本動の変移が古代と近代とで違ふのは、おのづから理由のある事であり、遺物の発掘或存が自然之をして異ならしむるのである。現代養に於て近代に於てそれやうな生物の主張が見られなくなつたのの如き障ない事と思ふ。けれども本動の古親は近代前の意味とは別であつて、是とそれとを協に混合すべきではない。その古代的意味の生動が、古代遺に表現してさう云ふものになるが、それは如何に具體化されるかが注意すべき問題と考へる所から、それに就て面が為設を隅して該者の講壁を煩はした次第である。

上代祭祀阯と其の遺物に就いて

（本会第三十五回総会講演）

大場　磐雄

一

我國上代の社會組織に敷し、祭祀が国を基礎に於分を占めてゐた事は、整然な文献上の證拠や、今もなを存続する古社古俗の存在によつて充分に確ひ知られる事であるが、之迄等古墳的遺跡に就いては、彼来二元説の断片的な報告及び原史時代遺跡の一項に祭祀阯の様を加へられる物があるこはいへ、なほ拙劣な状態を脱してゐる感でありも。蓋しその間を所は、宗教的觀念が物質的な遺構遺物の状態のみや解釈する事の困難さに依から、自然研究の対象外

第８図
「上代祭祀阯と其の遺物に就いて」

こうした「巨石遺

跡」に対する否定的評価は、『楽石雑筆』にみえる現地調査の所見とも一致するが、一方で古典にみる「磐境・磯城」を「祭祀阯」という枠組みの中に取り込もうとしていた姿勢は、一応両者を別個に論じた上で石信仰を論じた後年の「神道考古学」と比較すると、未分化な部分であった。

### 巨石問題における年代決定の重視

既に述べたように古典にみる磐境・磯城の問題は神籠石問題を経て、鳥居龍蔵によって「巨石問題」に持ち込まれた。本稿冒頭で述べたように、各地の巨石を欧州の巨石記念物と同様のメンヒル・ストーンサークル・ドルメンなどと解し、古典に見える「磐座・磐境・神籬・磯城・神奈備」と結びつけた（鳥居一九二五・一九二六）。さらに、日向延岡などの調査では、下部から「弥生式」土器片が出土することを根拠に、古墳以前すなわち「有史以前」の所産と主張した（鳥居一九二七・一九三五）。樋口も『伊予大洲の古代文化』（一九三〇）において、古典・神社名に見える石神を紹介した上で、三輪山中の巨石群を人工物として紹介し、ストーンサークル・「磐境」に比定し、石器時代から歴史時代初期、中心を金石併用時代から古墳時代初期にあったという鳥居の所論に基づく記述を行なっている。但し、樋口の場合、三輪山の報告（一九二七・一九二八）、あるいは完形の弥生土器や銅剣が出土した摂津保久良神社の報告（一九四二）などを見ると、事実報告に徹し、時期認定についても確実な遺物から判断を下しており、大洲報告はむしろ例外的とみるべきと思われる。

これより約十年の後、大場は「上代祭祀阯と其の遺物に就いて」を『神道考古学論攷』（大場一九四二）に再録するにあたり、註を付して「巨石問題」の部分は現在と意見が異なるとし、「磐座・磐境等の考古学的考察」（大場一九四一）の参照を求めている。同論文では鳥居の研究をドルメン・メンヒルと「磐境・磐座」を無造作に結び付けたもので、年代についても僅少な土器片と石器（？）を根拠とし、信仰的な性格を物語るものは何物も認められていないと批判する。また、神職、宗教家、「神代史」家らによる非学術的な巨石と「磐境」を結び付けた著作などに対し、学問的な考察の必要を訴えている。その比較検討などは本稿の対象を超えるのでここでは論じないが、鳥居や宗教家と比較した場合、古典や現在の神社信仰・民俗信仰を大きく取り入れている点では手法の形式上、類似する部分が多いのに対して、最も大きな違いとして指摘できるのは、遺跡の年代（遺物の存在）を重視している点である。

この点は、この後の「神道考古学」においても同様で、先に述べた現在（民俗例）または近い過去（文献）から遡るという視点では、事象自体は変化しないので、考古資料の意義は、その年代的遡源を指示する点にあるのである。大場は考古資料における年代決定は、既に考古・民俗・文献三位一体の研究を進めていた大場にとっては最も重要な問題であったと考えられる。

## 六　神道考古学提唱前夜の総括―「原始神道の考古学的考察」―

### （一）「原始神道の考古学的考察」の執筆

大場は「上代祭祀阯と其の遺物に就いて」に続いて、一九三〇年一一月から「原始神道の考古学的考察」を三回にわけて『神道講座』に発表する（大場一九三〇b・三一）。先史時代と原史時代に大別して関係する考古資料を概説するもので、先史時代については『神社と考古学』と概ね同様の構成である。原史時代については「1遺跡―一祭祀阯、二祭祀関係遺跡、2遺物―一祭祀遺物、二祭祀関係遺物」と、「上代祭祀阯と其の遺物に就いて」の分類を踏襲する。その内容は福岡から福島の二八例の祭祀阯を列挙した上で、「南豆に於ける特殊遺跡の研究」で示した祭祀遺跡の三つの特徴を挙げる。祭祀関係遺跡では1子持勾玉出土地、2土製動物出土地、3古墳附属の祭祀関係遺蹟、4磐境・磯城・神奈備の類、5其他の祭祀関係遺跡をあげるが、このうち4についてはその可能性のある場所として、三輪山、『出雲国風土記』

にある神奈備、大洲の神南山、美作宮座山を挙げる一方、「巨石遺跡」については考古学的証拠のないため断定し難く、神籠石についてもなお攻究の余地があると論じている。「上代祭祀阯と其の遺物に就いて」における祭祀阯への分類から変更しているが、これらが明確に磐境・磯城と認められれば祭祀関係阯に移すとも述べている。但し、三輪山から宮座山までを積極的に扱っている根拠については触れられておらず、曖昧な部分を残している。

祭祀遺物の項では、石製模造品、土製模造品（手捏土器を含む）、其他について器種や古典の記述を紹介している。遺物の順序に変更があるものの、概ね従来の記述と同様である。祭祀関係遺物には鏡、剣・刀・楯、玉類、子持高杯などをあげ、いずれも古墳出土品が多く、祭祀関係阯からも出土すると述べているが、これらは『神社と考古学』での記載を整理したものであろう。

最後に、「遺跡遺物より観た原史時代の宗教思想及び祭祀の形式」と題して、総合的考察を加えている。祭・政・葬が相関関係にあったことを指摘し、一定の地域を画して祭壇設備を整え（山の神、猪ノ子、真砂、馬見塚）、石製・土製の仮器を枝に懸け、神饌を供して奉齋したものと当時の祭祀を復元している。さらに、これらがほぼ全国的に存在することから、当時の共通的祭祀形式であり団体的なものであり、一方で子持勾玉や土馬などの単独出土は個人的な特殊祭祀であろうと推察している。これらはおそらく初めての考古学的な資料に基づく議論として位置づけられるであろう。

原始神道の考古學的考察

大場磐雄

第一章　序說

原始神道の研究は從來神話史の一部門として比較的等閑視せられた部分であつた。それは記紀を唯一の資料とする一經典紙上の性質から相當無理ある研究方法を必要としてゐる事と、その内容には隠る興味と深淵とに富むでゐる反面に、往々陷り易い種々な危險や障碍からの溺惑を回避しようとする學的良心に基いた爲であつた。然し幾近的純し來つた各種の文化經驗は、如上の危險と困難を排除して漸次原始神道の科學的研究が行はるゝに至つた。即ち比較宗教的觀察や、宗教民族學的檢討、又は民俗學上よりの新研究等がそれであつて、吾人が玆に繙れようとする考古學的研究も亦その一部に外ならないのである。

原始神道の考古學的研究に就ては先人の業績必ずしも得策でない。比較的優れた物に津田敬式氏の『神道考源論』（大正九年刊行）及び『神代史と宗教思想の發達』（大正十四年刊行）の二著があるが、之はその資料に考古學的遺物を含めた程度で、考古學を主として考察した物ては無かつた。考古學に中心を於た研究發表としては鳥居氏の二三が見られてゐるが、未だその綜合的研究は企圖せられてゐない。吾人も亦非才を顧ず微力を有し、二三の愚見を提唱した事があつた。先史時代（石器時代）のそれに關する物としては『石器時代研究思想の一端』が

111

第９図
「原始神道の考古学的考察」

## （二）「神社と考古学」から「原始神道の考古学的考察」へ

このように、神道考古学提唱以前における大場磐雄の祭祀遺跡研究は、『神社の考古学』を出発点とし、当時の動向を踏まえて、石製模造品や手捏土器の研究（「南豆に於ける特殊遺跡の研究」）と、「巨石遺跡」の研究（「上代祭祀阯と其の遺物に就いて」）の二方向を、やや時期を違えて行なったものであり、最終的に両者を踏まえた形で「原始神道の考古学的考察」が執筆された。『神社と考古学』以来の総括として位置づけることができる。最後にこの段階の特徴を改めてまとめておきたい。

祭祀遺跡については、「南豆に於ける特殊遺跡の研究」以降、古社境内を意識するものの、地上施設の欠如、内部・遺物配置の特殊性という、遺跡自体の特徴を重視している。この後、祭祀対象を第一に意識した著述となっていくのに対し、この段階の独自性を示している。他方、祭祀遺物については、特に模造品や手捏土器などの非実用品を中心に論じている。こちらはその後も引き続く特徴であり、日常的な遺物の祭祀への転用については祭祀関係遺物として積極的な位置づけは与えられない。

方法論に関しては、古典・民俗（現在の信仰）を考古資料の解釈に適用するという、三位一体の方法論が既に認められる。『神社と考古学』においては、むしろ考古資料の扱いが軽い部分もあったが、「南豆に於ける特殊遺跡の研究」以降は、特に祭祀遺物（模造品・手捏土器）の解釈に、古典・神社の実例を用いることが目立つ。冒頭で石信仰を例に紹介した古典・神社の実例を先に挙げた上で類似遺跡を示すという「神道考古学」の立論とは異なり、祭祀遺跡の認定はあくまで祭祀遺物の出土に基づいている点もこの段階の大きな特色である。

『神社と考古学』においては、呪物崇拝などの人類学の用語が散見され、「原始神道の考古学的考察」でも、石器時代の記述についてはそれが残っているが、原史時代については一掃されている。

「巨石遺跡」については、実地調査を行なった上で「上代祭祀阯と其の遺

物に就いて」で、特に年代を決定する遺物の欠如を根拠に否定している。三輪山や保久良神社など確実な遺物を伴う遺跡の発見は、こうした鳥居とは異なった視点にもとづく大場や樋口の実証的な研究の成果であろう。「祭祀遺跡」における年代決定は非学術的な発言への警鐘として、あるいは大場の研究の独自性を担保する要素として重視され、冒頭で紹介した「神道考古学」の方法論③（現在の神社・民俗信仰の遡及）を支える根幹となる。[11]

なお、こうした大場の祭祀遺跡研究に対し、鳥居龍蔵、折口信夫、宮地直一、柴田常恵らの影響のあったことは確実である。しかしながら、本稿で扱った部分に関して具体的な影響関係を示す資料を見出せないため触れることができなかった。ここでは「巨石問題」への取り組み、人類学理論・民俗資料の援用、古典の利用や『神社と考古学』の代筆、そして「祭祀阯」への取り組みなどの点で、これらの学者の研究内容と大きな接点を持っていたことを指摘するに留めたい。

**註**

(1) 柴田が内務省地理課に在籍したのは一九二〇年から一九二七年まである。

(2) 柴田の位置づけについては、酒詰仲男による山内・八幡・中野の共同戦線に対し「あわてた既成学界のピーク、柴田常恵、田沢金吾、後藤守一」という発言が参考になる。なお、酒詰はこれに続けて、「大場磐雄博士など、この大先輩から考えれば青二才に見えたのであろう、終りの頃ようやく参加を許された程度であった。」と述べている（酒詰一九六七、一一四頁）

(3) 本稿で扱う明治・大正期と現在では考古学用語や社号なども変化しているが、原則として現行の用語に従うこととし、当時の用語を用いる際は「」を付す。但し、「石器時代」「原史時代」の語については省略した。

(4) 無論、祭祀遺物についても分類・考察を行っているが、概説（大場一九五六・一九六三・一九六六など）などをみると、その主眼は自然物を対象とした遺跡にあったこと判断される。

(5) 古墳・横穴からの出土品など現在の土師器を含んだ広い概念である。

(6) 磐座・磐境・神籬・神奈備はいずれも古典に登場する祭祀の設備・空間を示す語で、その実態をめぐって諸説が提示されたが、現在では磐座―信仰の対象となる独立した石、磐境―並べて囲繞した祭祀設備、神籬―榊などで設えた祭祀設備、神奈備―神の鎮座する山や森とする大場の見解（一九四一、一九七〇）が有力である。他に加えられたものとして、中村久四郎「古代支那の金属文化」、石田幹之助「支那考古学に関する最近の諸発見」、関根正直「神代ながらの神嘗御親祭」、清野謙次「附録人骨測定表」があり、中国関係と神道関係を充実させたことが窺える。

(7) 石棒に関連して生殖器崇拝がその後の「純神道」に含まれない等断片的な記述は存在する。また、第二章で示された祭器と土器との系統関係については具体的には述べられない。

(8) 大場旧蔵書（國學院大學図書館蔵・楽石文庫テ3）を見ると、山ノ神、猪ノ子、津宮、米岡、天津神社に「◎」、大和国讃岐神社、下総国小松、美濃国上土居に「？」が書きこんでいる。「◎」は墳丘なしと記述されたもの、「？」は埴輪がないなど古墳として疑わしいと考えたものであろう。続く「されば石製品発見の場所中古墳以外に一種の遺跡を認むる如きは今や既に問題にあらざるなり」との高橋の結論には傍線を入れ、「然ず」と書き入れている。

(9) 谷川はこの報告の下編冒頭で、洗田遺跡の類例として三遺跡を追加しているが、その中で注目されるのが愛知県馬見塚三反田遺跡である。実は谷川は南豆調査に先立つ二月一二日に本遺跡を踏査し、その後五月七日にも森本六爾と共に訪れていた。『楽石雑筆』二月条には石製模造品の出土を記すものの遺跡の性格への言及はないが、五月条には「思うに古代祭礼の一遺跡ならんか」と記している（大場一九七五―二七九―二八〇頁）。「南豆に於ける特殊遺蹟の研究」上・中・下の刊行は六月・七月・八月であり、二月の段階では三反田遺跡を祭祀遺跡とは認識していなかったこと、また草稿の執筆は洗田と三反田の調査に挟まれた四月後半の短期間になされたことが推察される。

(10) 大場は「神道考古学の体系」において、「C遺物の発見されないもの」を挙げるが［第二図］、本文中では単に古社境内その他で伝説を伴う場所として、鹿島要石の例を示すのみである。

**引用文献**


足立鍬太郎・堀田美櫻男　一九二七　「南豆の遺蹟遺物につきて」『静岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第三集、一―一八頁、静岡県

魚澄惣五郎・梅原末治　一九二三　「大宮売神社」『京都府史蹟勝地調査会報告』第5冊、八一―八七頁、京都府

大野延太郎　一九〇〇a　「安房国安房郡東長田村遺跡ニ付テ」『東京人類学会雑誌』第一五巻第一六七号、一八六―一九二頁、東京人類学会

大野延太郎　一九〇〇b　「石製模造品に就て」『東京人類学会雑誌』第一五巻第一六九号、二八二―二八六頁、東京人類学会

大野雲外　一九〇二　「埴瓮土器に就て」『東京人類学会雑誌』第一七巻第一九二号、二三九―二四四頁、東京人類学会
大野雲外　一九〇三　「神社の祭器と埴瓮土器に就て」『東京人類学会雑誌』第一八巻第二〇八号、四一二―四一四頁、東京人類学会
大場磐雄　一九三〇a　「上代祭祀阯と其の遺物に就いて」『考古学雑誌』第二〇巻第八号、八―二三頁、聚精堂
大場磐雄　一九三〇b・三一　「原始神道の考古学的考察（一～三）」『神道講座』第九冊、第一〇冊、第一二冊、一一一―一二八頁、一四九―一六二頁、一八三―一九六頁、神道攷究会
大場磐雄　一九三五a　「神道考古学の提唱と其の組織」『神社協会雑誌』第三四年第一巻、六―九頁、神社協会出版部
大場磐雄　一九三五b　「池中の鏡（一・二）」『歴史公論』第四巻第八号、第九号、一一六―一二三頁、一一〇―一二〇頁、雄山閣
大場磐雄　一九三五c　「赤城山神蹟考（其一）・（其二）」『考古学雑誌』第二五巻第一一号、第一二号、一―二〇頁、一一―三五頁、聚精堂
大場磐雄・佐藤民雄・江藤千萬樹　一九三八　「南豆洗田の祭祀遺蹟」『考古学雑誌』第二八巻第三号、一七六―二一一頁、吉川弘文館
大場磐雄　一九四一　「磐座・磐境等の考古学的考察」『考古学雑誌』第三十二巻第八号、一―四六頁、吉川弘文館
大場磐雄　一九四三a　『神道考古学論攻』葦牙書房
大場磐雄　一九四三b　「古墳と神社―多岐神社を中心として―」『神道考古学論攻』二四二―二八〇頁、葦牙書房
大場磐雄　一九五六　「神社と祭祀跡」『考古学講座』六、一七八―一九五頁、河出書房
大場磐雄　一九六〇　「神道考古学生立ちの記」『具体例による歴史研究法』二四二―二四七頁、吉川弘文館
大場磐雄　一九六三　「考古学から見た神社の起源（一・二）」『月刊若木』第一七六号、第一七八号、二―四頁、二―四頁、神社新報社
大場磐雄　一九六四　「神道考古学の体系」『國體論纂』下巻（國學院大學紀要特集号）、二九―五三頁、國學院大學
大場磐雄　一九六六　「考古学上から見た古代祭祀の様相」『神道宗教』第四四号、一―一二頁、神道宗教学会
大場磐雄　一九六七　『まつり』学生社
大場磐雄　一九七〇　『祭祀遺蹟―神道考古学の基礎的研究―』角川書店
大場磐雄　一九七五a　『大場磐雄著作集』第六巻、雄山閣出版
大場磐雄　一九七五b　『考古学上から見た古氏族の研究』永井出版企画
大場磐雄先生記念事業会　一九七五　『楽石大場磐雄先生略年譜并著作論文目録』
喜田貞吉　一九一〇a　「神籠石概論」『歴史地理』第一五巻第三号、一〇―四三頁、三省堂書店
喜田貞吉　一九一〇b　「神籠石と磐境」『歴史地理』第一六巻第三号、一―六頁、三省堂書店
喜田貞吉　一九一三　「神籠石は山城にあらざるべし」『考古学雑誌』第四巻第二号、聚精堂
國學院大學日本文化研究所学術フロンティア推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクト　二〇〇五・〇六　『大場磐雄博士写真資料目録Ⅰ・Ⅱ』國學院大學日本文化研究所
後藤守一　一九二六　「磯城郡三輪町大字馬場山の神」『漢式鏡』三九〇―三九一頁、雄山閣
後藤守一　一九二七　「祭祀阯」『日本考古学』一五八―一五九頁、四海書房
酒詰仲男　一九六七　『貝塚に学ぶ』学生社
坂詰秀一　一九八三　『日本考古学文献解題Ⅰ』ニューサイエンス社
佐野大和　一九七六　「解説」『大場磐雄著作集』第五巻、三〇七―三一八頁、雄山閣出版
柴田常恵　一九一五　「イハイベに就て」『神社協会雑誌』第一四年第二巻、一三―一七頁、神社協会出版部
柴田常恵　一九二四　「祭祀阯」『日本考古学』国史講習録第一九巻、七六―七八頁、国史講習会
柴田常恵　一九二九　「金岡村御手洗池遺蹟」『富士の研究　四』一二〇―一二四頁、古今書院
高橋健自　一九一九　『古墳発見石製模造器具の研究』帝室博物館学報第一冊、帝室博物館
高橋健自・西崎辰之助　一九二〇　「三輪町大字馬場山の神古墳」『奈良県史蹟勝地調査会報告書』第七回、三四―五二頁、奈良県
谷川磐雄　一九二二　「石器時代宗教思想の一端（一～三）」『考古学雑誌』第一三巻第四号、第五号、第八号、二八―三三頁、二七―三五頁、二二―三〇頁、聚精堂
谷川磐雄　一九二四　「諸磯式土器の研究（一～三）」『考古学雑誌』第一四巻第九号、第一一号、第一五巻第一号、三八―四三頁、二三―三三頁、二六―五〇頁、聚精堂
谷川磐雄　一九二五　「武蔵国橘樹郡箕輪貝塚発掘報告（一～三）（諸磯式土器の研究四・五）」『考古学雑誌』第一五巻第三号、第一五巻第九号、第一六巻第四号、四四―四九頁、六―三一頁、一―二三頁、聚精堂
谷川磐雄　一九二六　「土偶に関する二三の考察」『國學院雑誌』第三三巻第五号、四八―五七頁、國學院大學

谷川磐雄　一九二七a　「南豆見高石器時代住居趾の研究」『考古学研究録第一輯　石器時代の住居趾』雄山閣
谷川磐雄　一九二七b　「南豆に於ける特殊遺跡の研究（上・中・下）」『中央史壇』第一三巻第六号、七号、八号、六五―七四頁、六一―七二頁、七四―九二頁、国史講習会
谷川磐雄　一九二七c　「伊豆半島の遺蹟遺物（上・中）」『史跡名勝天然紀念物』第二集第一一号、第一二号、六―一四頁、九―一七頁、史蹟名勝天然紀念物保存協会
津田敬武　一九二〇　『神道起源論』大鐙閣
鳥居龍蔵　一九二五　『人類学上より見たる我が上代の文化』叢文閣
鳥居龍蔵　一九二六　「日本の古い巨石遺蹟に就て」『自然科学』第一巻第三号（『鳥居龍蔵全集』第一巻所収）
鳥居龍蔵　一九二七　「日本の巨石遺蹟」『神道学雑誌』第二号、三九―五六頁、神道学会
鳥居龍蔵　一九三五　『上代の日向延岡』鳥居人類学研究所
中村耕作　二〇〇八a　「大場磐雄の縄文時代精神文化研究―「石器時代宗教思想」研究から「縄文人の信仰儀礼」研究へ―」『祭祀考古学』第七号、祭祀考古学会
中村耕作　二〇〇八b　「神道考古学の形成と伊豆の祭祀遺跡―大場磐雄の伊豆調査―」『平成二〇年度フォーラム　伊豆の神仏と國學院の考古学　発表資料集』七―二〇頁、國學院大學伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」グループ
樋口清之　一九二七　「三輪山上の巨石群」『考古学研究』第一輯、五九―七〇頁、考古学研究会
樋口清之　一九二八　「奈良県三輪町山ノ神遺蹟研究」『考古学雑誌』第一八巻第一〇号、第一八巻第一二号、四九―五九頁、三三―四九頁、聚精堂
樋口清之　一九三〇　『伊豫大洲の古代文化』梁瀬神陵奉賛会
樋口清之　一九三一・三三　「三輪遺蹟とその遺物の研究（一・二）」『大和考古学』第二年第四号、第三年第五号、一―九頁、三―一〇頁、大和上代文化研究会
樋口清之　一九四二「摂津保久良神社遺蹟の研究」『験杉会紀要』第四輯、國學院大學験杉会（『史前学雑誌』第一四巻第二・三号に再録）
宮地直一　一九二六―二八　「神社と考古学」『考古学講座』第一号（一―八頁分）、第二号（九～）、第三号（一七～）、第五号（三三～）、第六号（五七～）、第七号（八一～）、第八号（九七～）、第一〇号（一〇五～）、第一二号（一二一～）、第一五号（一五三～）、第一七号（口絵・一六一～）、第二〇号（一七七～）、第二四号（一九三―二〇七頁・扉・目次）、国史講習会
無署名　一九三〇　「上野精養軒に於ける総会の記」『考古学雑誌』第二〇巻第六号、四〇七―四一二頁、聚精堂
森本六爾　一九二六　「二三鏡鑑の新例について」『考古学雑誌』第一六巻第五号、三九―四八頁、聚精堂
やじり生　一九〇〇　「原街夜話（第二回）」『考古』第一篇第四号、三四―三八頁、考古学会
八幡一郎　一九三四　「祭祀場址」『北佐久郡の考古学的調査』一七七―一八一頁、岡書院
和田千吉　一八九八　「『鏡と剣と玉』を讀で所感を述ぶ」『考古学雑誌』第二巻第二号、九五―一〇三頁、聚精堂

付記　本稿で用いた写真はいずれも國學院大學研究開発推進機構学術資料館所蔵の大場磐雄博士写真資料（國學院大學日本文化研究所学術フロンティア推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクト　二〇〇五・〇六）である。obに続く番号はその資料番号、「」は包紙に記された注記である。